

会員調査からみたコロナ禍における初年次教育

山田 剛史¹

関西大学

The First-Year Experience Under the COVID-19 Pandemic as Seen from Member Surveys

Tsuyoshi YAMADA

Kansai University

1. はじめに

2020年初頭より世界中で猛威を振るう新型コロナウイルス感染症(COVID-19)は、大学教育にも大きな影響をもたらした。特に、大学入学直後からキャンパスに来ることが出来ず、遠隔授業を余儀なくされた新入生(2020年度・2021年度入学生)にとっては、学習面や精神衛生面での影響が大きかったことが様々な学生調査からも読み取れる。各大学においても、緊急対応型遠隔授業の実施に伴う通信環境やデバイス等ハード面での整備、ガイドライン等ソフト面での整備、FD活動の推進など様々な対応を行ってきた。経済的支援やピア・サポート等の施策を盛り込んだ緊急学生支援パッケージの導入なども進められた。このように教育・学生支援双方で様々な課題に挑戦してきた。

このような中、初年次教育学会では、高校教育から大学教育への円滑な移行を促進するための初年次教育が、どのように取り組まれ、どのような課題に直面し、どのようにその課題に取り組んできたか、教職員からみた実態の把握とこれからの初年次教育のあり方について提言することを目的に、大学において様々な立場で今回の問題に対応してきた会員を対象にアンケート調査を実施することとした。実施の経緯に関して、理事会に置かれている課題研究活動委員会が中心となり、「初年次教育におけるCOVID-19への対応実態についての調査WG」(座長：濱名篤委員長)を設置し、そこで調査内容や実施方法等について協議した。その後、理事会において倫理審査を行い、承認を得て、実施する運びとなった。本稿では、当該調査の結果の一部を取り上げる。

2. 調査概要

《調査期間》2021年7月22日(木)～2021年8月20日(金)

《調査方法》Google フォームによるオンライン調査

《調査対象者》学会員 121 名(回答率 22.5%)

¹ 関西大学 t-yamada@kansai-u.ac.jp

表1 調査対象者の内訳

a. 設置種別	b. 機関種別	c. 学生総数	d. 専門分野
国立 11 名 (9.1%)	大学院大学 3 名 (2.5%)	5000 人以上 46 名 (38.0%)	人社系 65 名 (53.7%)
公立 8 名 (6.6%)	四年制大学 106 名 (88.3%)	2000～5000 人 36 名 (29.8%)	理工系 14 名 (11.6%)
私立 102 名 (84.3%)	六年制大学 5 名 (4.2%) 短期大学 5 名 (4.2%) 高校 1 名 (0.8%)	2000 人未満 39 名 (32.2%)	医療系 11 名 (9.1%) 教員養成系 9 名 (7.4%) 芸術・体育系 2 名 (1.7%) 上記以外 8 名 (6.6%) 職員 11 名 (9.1%) その他 1 名 0.8%

《調査内容》

A. 基本情報(所属機関の概要や回答者の属性), B. 学内での組織的な対応(2021年度の学生への対応措置や2020年度以降の初年次教育の実施方針), C. 初年次教育の特徴(2021年度前期の科目内容や実施方式, コロナ禍以前と比較した教育方法や学生の意欲・スキル・技術等の獲得度, コロナ禍以前とコロナ禍以降の各学期とを比べた納得度, 初年次生に対する遠隔授業のメリット・デメリット), D. 自由記述(コロナ禍での初年次教育の実践上の工夫, 日本の初年次教育にもたらされるであろう変化)の4つに分けられる。

3. 調査結果と考察

(1) コロナ禍における初年次教育の実施形態

コロナ禍において初年次教育はどのような形態で実施されたのか。機関方針として、2020年度の前期はほとんどが遠隔授業を中心に展開されるが、2020年度後期以降は対面と遠隔の併用(ハイブリッド型)へと移行している(図1左)。さらに、2021年度前期の具体的な提供方式としては、ハイブリッド型が半数以上を占め、次いで対面、同時双方向型と続く(図1右)。初年次教育は少人数クラスが中心となることや科目の性質上もあり、一般的な授業に比べてオンデマンド型の形式が少ないことが伺える。

(2) コロナ禍以前と比べた初年次教育の教育方法

上述した通り、初年次教育は科目の性質上、演習や実演、学生同士の交流など、アクティブラーニング型授業で組み立てられることが主流である。そのため、コロナ禍での遠隔授業の導入が与える影響は他の科目より大きいことが想定される。そこで、コロナ禍以前と比べて、初年次教育におけるアクティブラーニングに係る取組みがどう変化したのかについて聞いた結果が図2の通りである。

いずれの方法についても、コロナ禍で増えたと答える割合より減ったと答える割合の方が多くみられた。その上で、グループワークについては、増えたと答える割合が比較的多いこと、プレゼンテーションについては、増えたと答える割合と減ったと答える割合との差が小さいことも伺える。対面と遠隔とで分かれた可能性もあるが、同時双方向型では、ブレイクアウトルームや画面共有を活用すれば、グループワークやプレゼンテーションなどの活動は取り入れやすいこともあるかもしれない。

(3) コロナ禍以前と比べた学生のスキルや技術等の獲得度

大学で学ぶ上で基盤となる力を身につけることは初年次教育の主要な学習目標である。

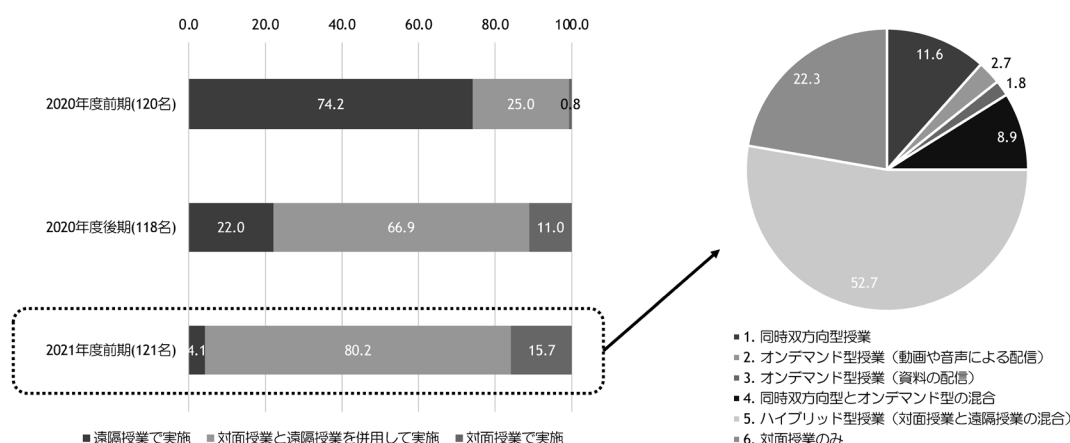


図1 コロナ禍における初年次教育の実施形態（機関方針）と2021年度の提供方式

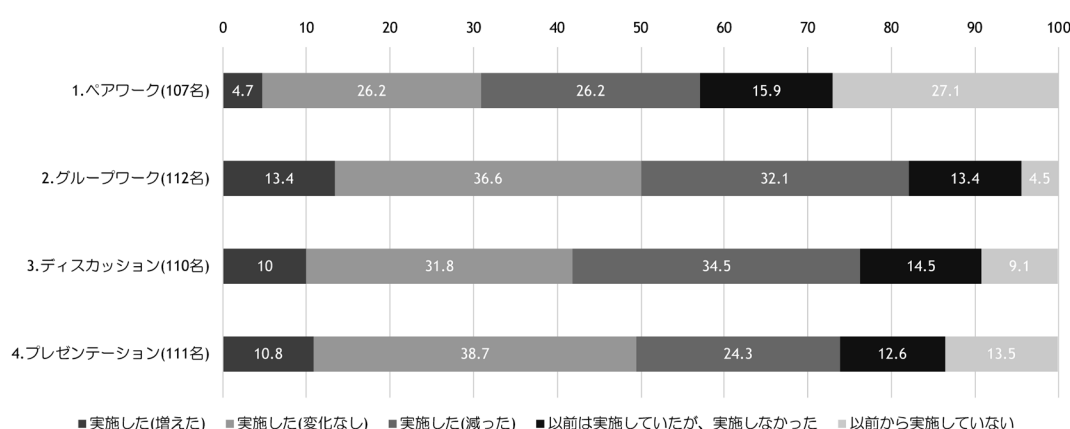


図2 コロナ禍以前と比べた初年次教育の教育方法

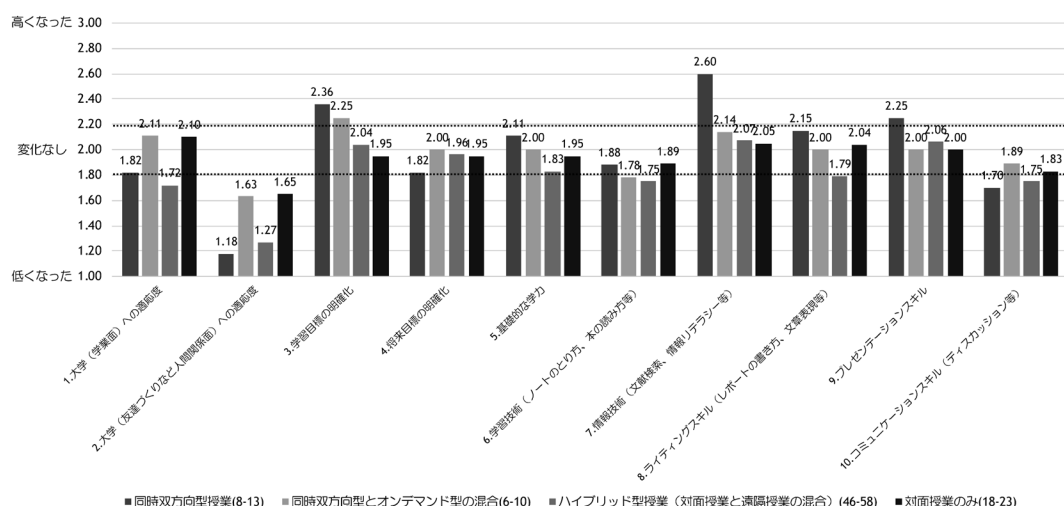


図3 コロナ禍以前と比べた学生の実力や技術等の獲得度

このことがコロナ禍以前と比べてどう変化したのか(図3)。

まず、ポジティブな変化として、情報技術（文献検索、情報リテラシー等）やプレゼンテーションスキル、学習目標の明確化については、コロナ禍で高くなったと回答している割合が高くなっている。遠隔授業の性質上、授業自体がオンラインやICTを使って実施

するため、こうした力が身に付きやすかったと言える。逆に、コロナ禍で低くなったと回答している割合が最も多いのは、大学(友達づくりなど人間関係面)への適応度であった。各種学生調査からも、特にコロナ禍で入学することを余儀なくされた2020年度入学生、2021年度入学生の孤独感の高さや関連して生じる精神衛生面での不調などが示されているが、初年次教育に関わる教職員も同様の認識を有していることが伺える。また、コミュニケーションスキルや学習技術についても、コロナ禍で低下したと回答する割合が多かったことから、アカデミックスキルやソーシャルスキルなど、初年次教育の重要な学習目標を学生が身につける上で、遠隔授業という形式はデメリットの方が大きいと判断される。他方、大学(学業)への適応度やライティングスキルについては、コロナ禍以前と比べて低くなったという割合と高くなったという割合の両方が一定数存在している。対面か遠隔かという違いもあるかもしれないが、同じ形式の中でも教員の工夫によって促せる余地がある部分なのかもしれない。いずれにせよ、対面か遠隔かなど、実施形式の是非を議論する際には、設定された学習成果(学習目標)を学生が身に付けることが出来ているか否かの視点から行われる必要がある。

(4) 授業形態の違いによる学生のスキルや技術等の獲得度

前述の点を踏まえて、授業形態の違いによってどのようなスキルや技術等の獲得度に違いが生じるのかについて検討を行った(図4)。

変化なし±0.2にラインを取り、それより高いあるいは低い項目を中心にしてみると、同時双方向型は、情報技術や学習目標の明確化、プレゼンテーションスキルが高い値を示している。他方、大学(友達づくりなど人間関係面)への適応度については、いずれの形態も低く、特に同時双方向型とハイブリッド型でかなり低い値が示されている。対面を含むハイブリッド型でここまで低かった理由として、対面とは言え通常時とは異なり、学生同士の交流を図ることが難しいなど様々な制約下で授業やキャンパスライフを過ごすことが強いられていた可能性も考えられる。また、対面と遠隔とのハイブリッド型は全体的に見ても相対的に値が低くなっている。多くの大学でハイブリッド型が実施・推奨されているが、実施負担は高く、環境面・制度面でのサポートや綿密な授業デザインが不可欠であるなど、学習効果を高めるためには課題も多い。

関連して、この4つの授業形態にオンデマンド型を加えた5つの授業形態を独立変数、

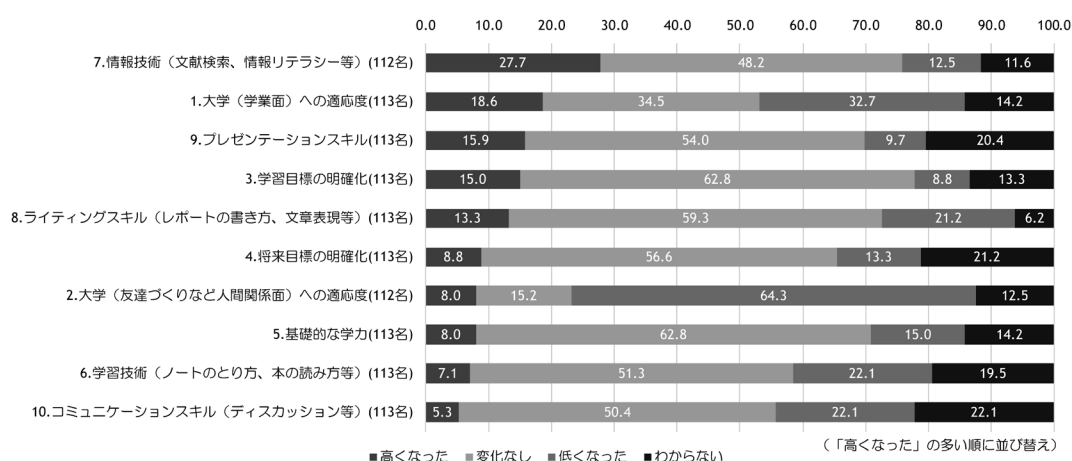


図4 コロナ禍以前と比べた学生のスキルや技術等の獲得度(授業形態別)

「コロナ禍以前と比べて、2021年度前期はうまくいったか」(「うまくいった」～「うまくいかなかった」の4件法)の値を従属変数とする一要因分散分析を行ったところ、1%水準で有意差が認められた($F(4, 106) = 5.18$)。多重比較(TukeyのHSD検定)の結果、同時双方向型とオンデマンド型の混合($N=10, M=3.30, SD=0.48$)>ハイブリッド型授業(対面授業と遠隔授業の混合)(59, 2.90, 0.61)>オンデマンド型授業(5, 2.00, 0.71)、また、同時双方向型授業(13, 3.15, 0.56)、対面授業(25, 3.08, 0.49)>オンデマンド授業(5, 2.00, 0.71)で5%水準の有意差が認められた。人数が少なく偏りもあるため、結果の一般化には注意を要するが、遠隔のみのハイブリッド型は相対的に高い値を、オンデマンド型は低い値を示していた。オンデマンド型を導入している大学は多く、大規模授業等のとりわけ知識伝達型の講義を実施する上で一定の効果が期待されるところではあるが、初年次教育の性質を鑑みると、オンデマンド型は期待する学習効果が得られない可能性が高いと推察される。

(5) 初年次生に対する遠隔授業の利点・欠点

大学初年次は、高校から大学に入学し、学問的・社会的・人間的基盤を確立するための重要かつ独特な意味を持つ時期である。そして、そこを担う初年次教育は、大学教育一般とは切り分けて検討すべき事項が多く存在する。此度のコロナ禍が招いた遠隔授業が初年次生の学びと成長にどのような影響をもたらすのか、そしてコロナ後のニューノーマルの初年次教育に何を残し、何を生かすべきなのか、丁寧に議論・検討していくことが求められる。ここでは、初年次生にとって遠隔授業はどのような利点・欠点があるのかについて取り上げる。多くの大学で、様々な調査、特に学生を対象とした調査が実施され、項目にバラツキはあれど、この問題が常に取り上げられてきた。それらの結果も意識しつつ、教職員を対象に、初年次生に対する利点・欠点に特化した今回の調査の結果を見てみたい。

まず、遠隔授業の利点について、最も多く選択されていたのは「場所や時間にとらわれず授業できる(76.5%)」、次いで「自分のペースで授業できる(67.2%)」、「ICTを活用する能力が高まる(67.2%)」であった(図5)。場所や時間の制約を受けないというのは、学生調査でも常に突出して選択されるもので、遠隔授業の最大の利点であると言える。ICT活用能力が高まるというものについては、大学教育一般を対象にした調査(教員・学生)ではここまで高く出ないことから、初年次教育の特徴が出ているところだと言える。また、

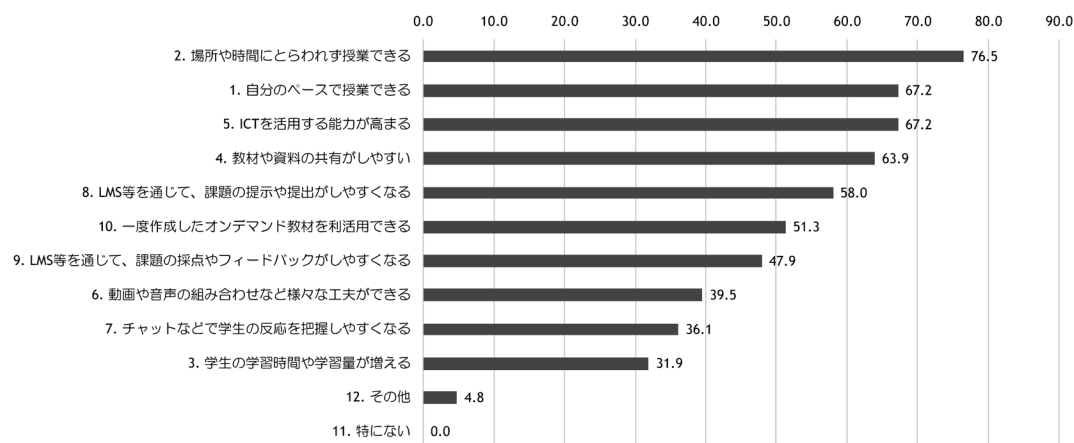


図5 初年次生に対する遠隔授業の利点

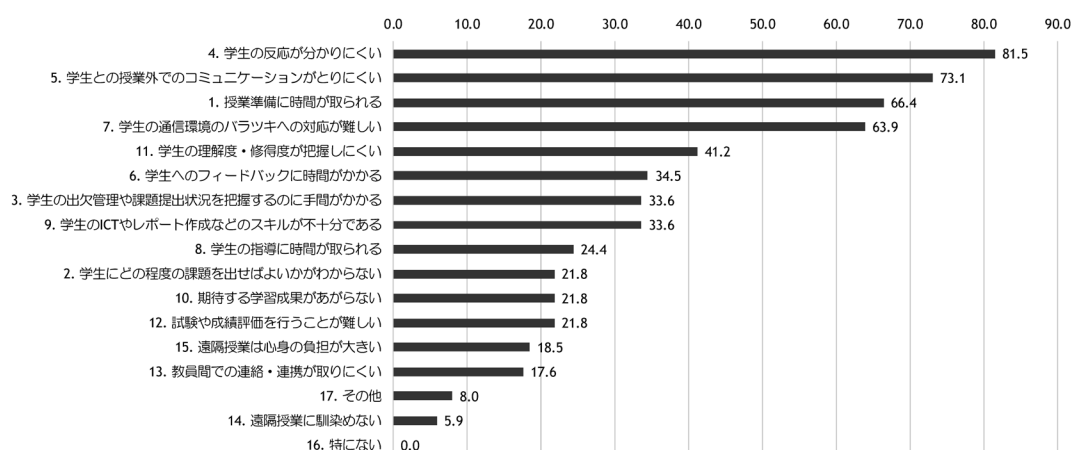


図6 初年次生に対する遠隔授業の欠点

「教材や資料の共有がしやすい(58.0%)」や「LMS等を通じて、課題の採点やフィードバックがしやすくなる(51.3%)」も半数を超えており、対面時のような印刷・配布・回収・集約といった紙媒体でのやり取りに伴うコスト(時間・労力・資源)を大きく下げることにつながっている。演習などが多い初年次教育においては、課題提示～フィードバックまでのプロセスが効率化できることは大きなメリットであると言える。また、データを持参し、PCに移して、モニターに投影するといった対面時のプレゼンテーションに比べて、ボタン一つで切り替え、資料共有や画面共有が出来るとともに、チャットなどで質疑・コメント等のやり取りが簡単に出来る遠隔形態(同時双方向型)のメリットは大きい。

次に、遠隔授業の欠点について、最も多く選択されていたのは「学生の反応が分かりにくい(81.5%)」、次いで「学生との授業外でのコミュニケーションがとりにくい(73.1%)」、「授業準備に時間が取られる(66.4%)」、「学生の通信環境のバラツキへの対応が難しい(63.9%)」であった(図6)。上位2項目は、他の調査でも比較的高く出てくるが、ここまで高い値ではないことから、初年次生を担当する教員にとってこのことが非常に重要で切実な問題であることが伺える。何とかして学生の反応を知ろう、学生とコミュニケーションを取ろうという意識の裏返しであるとも言える。遠隔形態で学生の反応を把握することは難しい。オンデマンド型ならそもそも一方通行になるし、同時双方向型でも全員がカメラをオンにして授業に参加するというケースは極めて少ない。学生がどういう状態(学習意欲や理解度、精神状態等)で、どのように授業に関与しているかを把握することは、授業を円滑かつ効果的に進め、学生の成功(Student Success)を実現する上で非常に重要である。それは、課題やテストを頻繁に出して把握するということだけに留まらない。とりわけ初年次生に対しては、こうした点を重視することの必要性、ひいては初年次教育の意義・役割が、コロナ禍での遠隔授業やキャンパスの閉鎖などのかつてない状況によって浮き上がってきたと考えることも出来る。

(6) コロナ禍での初年次教育の工夫

ここまで、コロナ禍での初年次教育に係る様々な観点について取り上げてきた。ここでは、自由記述によって得られたコロナ禍での初年次教育の工夫についていくつか紹介する(表2)。カテゴリーは筆者が付与した。学生同士・学生間や教員間での繋がりをいかにして担保するかといった点など、様々な工夫が垣間見える。なお、全ての記述内容について

表2 コロナ禍での初年次教育の工夫(自由記述)

カテゴリー	内容
教材作成	動画講義作成において、一人で講義するのではなく、聞き手と話し手と2名で作成した。これにより、飽きない、聴きやすい動画にある程度できた。(私立・小規模・理工系)
授業デザイン	基本的な学習事項はオンデマンド型(動画)で提示し、実践的な課題とフィードバックは zoom など で双方向授業としたため、効率的な指導ができた。(私立・中規模・人社系)
コミュニケーション	入学直後の学生間のコミュニケーションを促すために自己紹介の時間を数回設けるようにした。マスク着用下でお互いの表情が読み取れないことから顔写真を提示しながらの自己紹介なども取り入れた。(私立・中規模・医療系)
コミュニケーション	オンデマンドの授業では、授業時間中に Zoom を開けっ放しにする、何でも書き込んで良い質問箱を設置するなど、学生とのコミュニケーションを維持しようとししました。(国立・中規模・教育学生支援系)
FD	担当者により提供内容がばらばらな部分があった初年次演習の内容について、資料検索と文章作成に関してオンラインで統一した内容を5回分作成して、担当教員間での授業内容が統一されたことで、従来からの課題が克服できた。またこの統一コンテンツを21年度も授業内ないし予習資料として用いることで、方法は多様であっても学ぶ内容について統一を図ることができた。(私立・大規模・教員養成系)
FD	授業開始後は、毎回の授業後、担当教員が集まる振り返り会を開催し、オンライン授業での不安・問題点を共有し、その場で対策を検討することができた。インターネット回線が繋がらなかった場合の授業プランと教材をあらかじめ教員間で共有したり、映像コンテンツ作成に強い教員がオンデマンド動画を作成したりと、組織として各教員の強みを生かしながら機動力を持って対応できたことで、対面授業のときよりも学生の学習の質や学生からの授業への評価が高かったと感じている。(私立・大規模・人社系)

表3 コロナ禍を経て、日本の初年次教育にもたらされる変化(自由記述)

カテゴリー	内容
総論	ポストコロナであっても遠隔での授業方法は変わっていかないであろう。またこのパンデミックで学生は対面授業と遠隔授業の両方の質について敏感になっていると感じており、今後は両方の質が問われる時代になっていくのではないだろうか。そのような中、高大接続(入学前教育含む)がますます重要になってくると思われる。
コンテンツ	大学(特に大きな)は、対面講義と web 講義の両方を求められるようになるかもしれません。それに対応できるように、初年次教育の中に、 web 講義の受講の仕方、コツなどを伝えるような、また、経験するようなコンテンツが含まれるかもしれませんね。
授業デザイン	レポートの書き方などスキルを習得する授業では、授業動画を通常授業に取り込むことで反転学習が可能となり、対面授業では課題のフィードバックや実践的な指導に時間と労力を割くことが可能となる。
関係形成	オンライン授業が多いと友人作りに苦労している学生が多く見受けられるので、「人間関係形成の場」としての初年次教育の役割が重要になってくるのではないかと考える。
ソーシャルスキル	初年次教育における学びでは、従来どおり、個人に関する学習スキルを育成するのはもちろんであるが、コロナ禍を経て、自分の居場所を確保するスキル、人間関係構築スキルなど、個人―集団の切替を行いながら、社会で生きてくためのスキルを育成する必要があるであろう。
効果検証	方法論についてのみ議論をしたり、対面での学修成果を事後的にアンケートなどから感覚的に評価するのではなく、大学の文脈に照らした教育目標やその到達度評価などが、冷静に求められるようになってくると考える。
組織支援	コロナ禍が収まっても ICT スキルの必要性は変わらないと思います。学生、教職員が取り残されることがないように、個々人の能力や自主性に依存することなく、組織としてしっかりとサポートをする必要があるのではないかと思います。

は、初年次教育学会ウェブサイトに掲載しているため、そちらを参照されたい。

(7) コロナ禍を経て、日本の初年次教育にもたらされる変化

最後に、今回のコロナ禍がこれからの初年次教育にどのような変化をもたらすかについて、自由記述で回答してもらった(表3)。個別の内容について触れることは出来ないが、これからの初年次教育を考える上で重要な観点が多く含まれている。

4. おわりに

今回の会員調査を踏まえて、コロナ禍が初年次教育に与えた影響は非常に大きく、その意義や役割を再認識することが出来たとともに、これからの初年次教育の実践上・研究上の課題を多く見出すことも出来た。今後、コロナ禍という緊急事態下での不可避免的な遠隔授業の実施という段階から、その意義も踏まえつつ積極的な遠隔授業の活用へと徐々に移行していく。対面か遠隔かという二分法ではなく、双方を組み合わせることで更に質の高い初年次教育を実践していくためには、より精緻な授業デザインや多角的な効果検証、支える組織や制度、教職員のあり方の検討、それらに係る研究の進展が不可欠であろう。

最後に、今回の調査にご協力いただいた会員みなさまに厚く御礼申し上げます。